

明治卅七年一月十四日第三種郵  
便物認可(毎月一回廿五日發行)  
明治四十一年四月二十五日發行



鈴

銀

號一卅第



# 社告

本社は左の通り分擔を定め居候間書信の發送等は此の區別に依られたく候。

石見邑智郡田所村下田所 銀鈴社事業部

右は社友加盟、購讀申込、廣告に關する事件を取扱ふ。

石見邑智郡田所村下龜谷 銀鈴社編輯部

右は社友及び一般讀者の寄稿、新刊雜誌類の寄贈等編輯一切に關する事件を取扱ふ

四月二十五日 銀鈴社

銀鈴

第參拾壹號

明治四十一年四月二十五日發行

春雨

菅原紅雨

春の雨見ずや少女が唇の嚙脂ながすと花はしづくす

(一) 白き國王女のおはすおん城と爺がかたりを君

(二)

もききしか  
 緋のしづく緑のしづく小なる鏡にうつし君  
 は泣くらむ  
 「彼の獸金の征矢もて射てとらむいぞとせ  
 せへ」呼ぶにはやなし  
 とこしへに天もたらすとあゝ瞬時毒の一箭に  
 消ぬてあとなし  
 誰ぞかかる希望の色に涙して世をばそむきし  
 そは去年のわれ  
 「いかでわれ汝が胸の扉を焼きすてむ」叫ぶ  
 聲しぬ炎の少女  
 暗き國のみをもとめて二年をわれ彷徨ひぬ戀  
 に破れて

旅 咏 (二)

——松江紀行の歌——

河 野 翠 漱

ふるさとの父母戀し妻ごめに八重垣つくる御  
 祖戀しき

わが心をさなき前にたちかへる鎮まりわます  
 數のみ神よ

(三)

白髪はくはつの物ものよく語るかた爺おぢに連れつ神話しんわが中なかの添人そへびとと  
 なる

(四)

嫁が島海の荒男が一念の戀ゆるさぬやふもひ  
設けぬや

大已貴み裔のひとり三千歳の後の年月つかふ  
まつりぬ

霧ふれ  
わが袂神門平らのさむ風に吹かれ靡さぬ青き

湖の姫よ山のうからの一人が珊瑚の舟しみ供  
仕へむ

追憶

甲村沙汀

際涯もなく美しい春の夕空を、無情な雲は  
用捨なく、いつとはなしに包んで了つた。長  
閑な天地、若々しい春の血潮の通つて居た一  
帯の眺めは、薄暗く、黄色くたそがれて、雨  
さへそぼくと降り出した。

自分は今、此の濕つた、陰鬱な、空氣の中に  
、痛ましい我が半生の追憶を、快く繰返さ  
う、自分にはこれが唯一の慰藉である。

(五)

恰度自分が七つの秋、稻の穂のたわくと美

(六)

事に熟した頃であつた。  
 なつかしい父上は、永の病患が差逼つて、散  
 るは木の葉、冷めたい死の手に捉へられ、歸  
 るが如くに逝かれた。あはれ此日、自分は、  
 覆載眇々として憑るなき天外の孤兒となり  
 、悲しい浮世の荒海に、初めて纜を解いた  
 のである。

かくて自分は、わが母とも慕ふ伯母の家に、  
 寄るべなき身を伴はれることゝなつた。  
 時の流れは暫らくも止まず、二十年といふ短  
 からの月日を、あらゆる辛酸の中に育つて、  
 幾度、わが孤獨の寂しさを泣いたらう！  
 若し我がこの悲惨な歴史を綴り終る時もあり

(七)

うば、自分は先づ、日に夜になつかしみまゐ  
 らする、わが亡き父上のみ墓に献じたい！！  
 \* \* \* \* \*  
 窓外の雨、絮よりも細くそゝいで居る。

(完)

### 歌界時言

閑古鳥

松江に八千矛會といへる歌會あり、湯川某  
 之が主幹として、常に地方新聞紙上に製作を  
 發表し、吃々倦まず、吾人の甚だ多とする所  
 なり。然れ共、吾人は、全會作物の上に見て

(八)

その趣味、その形式が、吾人の平素懐する所の意見と、遙かに相距れるものあるとを悲まざるばならず、蓋、全會の製作は、今の所謂新派に以て非、固より亦舊派の流にもならず、換言すれば、舊派の陳套を脱せんとして得ず、新派の嶄新を學ばんとして未到らざるもの乎、吾人より見れば、その一作一篇毎に殆んど嘔吐三升の材たらざるはなし、今にして省みる所なくんば、常に時代思潮に後れ、先人の糟粕によつて僅かに生息し得るに終らんのみ。

吾人聊か信するところあり、敢てこの苦言を寄す。乞ふ解せりや。

# 白光

月森神來

## △歌曲

わが弾くは——  
作者誰ともわかねども  
日の照る下の西東  
少女童の相うたふ——  
そは戀の曲

## △カンテラ

ヒジヒジと暖聲あげて  
カンテラは呻びぬ。寒さ

(九)

夜の城の沈黙の室に。

蹣跚と風にあふられ

炎の芽ゆれぬ。冷たき

死の色の鉛の壁に。

血は涸れぬ。悶に堪へで

カンテラは死しぬ。悲しき

犠牲に逝く少女のさまに。

ふとわれは我が世の運命

しのび泣く。彼の黒き手に

捉へらるその戦慄に。

(完)

紙 燭

森 脇 桃 村

いまわれは灌木しげる北國の大野の果に沈む

日を見る

野邊おくる白き被衣の女達わが胸を行く悲し

からすや

破れし髪修し再び甘き酒醸せと強ひぬ黒髪の

人

空色の衣して君は黒髪を梳きておはさむ七月

の晝

胸の埴土君み手づから鋤いれよ醜草されど赤

き果はつく

(二一)

有井正徳

いたまじき別離わかれに泣きし日とかぞへ胸むねいたく  
とまとま細き雨する

「さめはてよ」心の奥にかく呼よばふ刹せつ那なまたき  
く「死しにといつれぞ」

枯れし花なほ香かほりすと廢園はいえんにふと笑みもらす少  
女寂しづしき

甲村沙汀

あゝ天あめに瞳ひとみのうれひ何ものにかかむや君は人  
の子ならぞ

いま君がみ手にすがりて忍び泣く春の夜の街  
いざ火こそ降れ

紫風

「再またびは戀ひせじ」といまおもひでの花の影かげ趁  
ふ蝶かたのあたまし

吉田櫻川

磯姫いそひめは青の袴しとねに手を支へ鼓うつなり春のわだ  
つみ

あはれいま見すや「信」なき人の子のうつろの  
胸むねに刻きむ「偽」

緋ひの袴はかま従者じゆさの少女の緋の袴紙し燭そくして行く君が  
左右さむらいを

おほぞらをゆたのためたに錦雲にしんうんの流るゝ見れ  
ば君の戀こひしき

しめやかに春雨はるあめすなり暗愁あんしゆの涙なみだにうつる灯  
の影

(三一)



雜吟

雨翠

種俵浸すや花の散る夕  
 家毎に浸す俵や川一つ  
 籬の日や柳も垂れて草の家  
 恥かしき顔のはてりや桃の酒  
 片隅に老が念佛や薪能  
 薪能梅散る七日月夜かな  
 能の面けむる焚火に反けたり  
 逢はぬ戀星を見る目に冴返る  
 冴返る林の中の一寺かな  
 兵と放つ矢は金星に冴返る  
 冴返る 大教正の祭詞かな

卓上詩話 (二)

翠 漱

■詩歌は情熱の發作である。厘かに辭句の摸倣と踏襲とを以て、得々たる作家の多いことは、我等の常に痛憾とする所だ、皮相の技巧や、修飾やを以てゴマカシ去らんとするは、抑々小人の狡手段である。記せよ、詩歌は寸毫だも、虚偽と粉飾とを容さぬ。

■情熱は教ふべきものでない、詩人は生るべくして作るべからず、是れ動かし難い鐵案だ、千古不滅の金言だ。詩人は詩人の資質を具へて生れ、詩人たる經過を終へて完成せられ

る

■併し茲に除外例のあることを忘れてはならぬ。それは詩人の或る程度まで作られ得ることだ、詩才の無いものでも、達し得らるゝ或る地點のあることだ。所以者、眞に詩人の稟性を有せずとも、全人類通有の情緒に基いて、習練によつて養はれた詩歌の技巧を試むる處に、結果する。

■情緒の奔溢沸騰した時、それを表現するに堪へ得る特別の技巧を有てるものは、たやすく創作し得るであらう。我等は這種の詩人も、ある意味に放て歓迎する。否、是等多くの詩人に因縁して、初めて天才は生れ来る。

▲寄贈新刊 △朝虹(四ノ三)……………千葉縣朝虹會

△ウッキジロ(五ノ五)……………埼玉縣浮城會△藻の花

(四ノ十二)……………東京藻花吟社△愛國少年(一ノ一)

……………三重縣愛國少年會。

▲社友募集 本認六ヶ月分代金貳拾五錢前納者は社友として待過す、一般讀者は成るべく社友となられたし。

▲投稿募集 文藝を愛するの士は奮つて投稿せられよ、小説、詩歌、俳句、譯文、美文、評論事等政時事に涉らざる限りなるべく廣く之を募集す。

▲次號原稿べ切 五月十二日。

銀鈴  
廣告料

三册郵稅共拾參錢六册全前金貳拾五錢  
一行拾錢 一頁壹圓 半頁前金六拾錢

明治四十一年四月廿三日印刷  
明治四十一年四月廿五日發行

(銀鈴第卅一號)

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一

發行兼編輯人 河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一

印刷人 木村柳三郎  
印刷所 赤名活版所

編輯所

石見國邑智郡 田所村下龜谷 銀鈴社編輯部

發行所

石見國邑智郡 田所村下田所 銀鈴社事業部

明治卅七年一月十四日第三種郵  
便物認可(每月一回廿五日發行)  
明治四十一年四月廿五日發行